

令和4年度

無料

環境研セミナー

がんの研究に関する最前線の情報についてお話します

内 容

「オルガノイド(培養ミニ臓器)研究から 得られる発がん過程への洞察 —細胞と個体の橋渡し—」

千葉県がんセンター研究所 所長

筆 宝 義 隆 氏

Yoshitaka Hippo

1994年に東京大学医学部卒。1996年から東京大学第三内科に入局(消化器グループ)し、2000年に東京大学大学院医学系研究科を修了(医学博士)。2005年からコールドスプリングハーバー研究所博士研究員、2009年から国立がん研究センター研究所ユニット長を経て、2014年に千葉県がんセンター研究所の部長に就任。2022年から現職。



日 時

令和4年

10月7日(金)

11時10分～11時55分(開場11時)

当該イベントは新型コロナウイルス対策を講じつつ開催いたします。ご来場の際はマスク着用と手指消毒のご協力をお願いします。また中止する場合もございますので、ホームページをご確認頂くようお願いいたします。

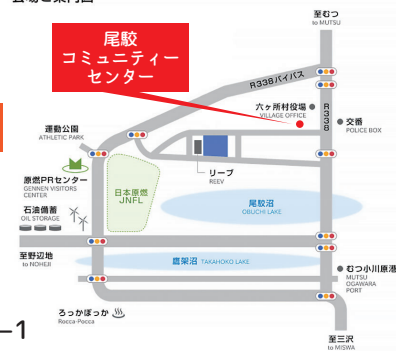


会 場

尾駮コミュニティセンター
(六ヶ所村)

青森県上北郡六ヶ所村大字尾駮字野附1161-1

会場ご案内図



お申し込み方法

参加をご希望の方は、ホームページでお申込みいただくか、電子メールで「環境研セミナー10/7参加」と住所、氏名を明記してお申込み下さい。

公益財団法人
環境科学技術研究所
共創センター

TEL.0175-71-1240 FAX.0175-71-1270

〒039-3212 上北郡六ヶ所村尾駮家ノ前 1-7

ホームページ <http://www.ies.or.jp/>

電子メール kanken@ies.or.jp

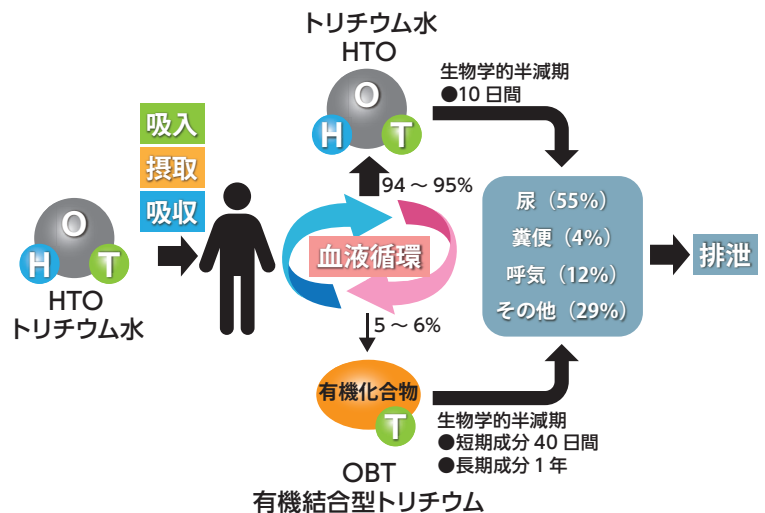
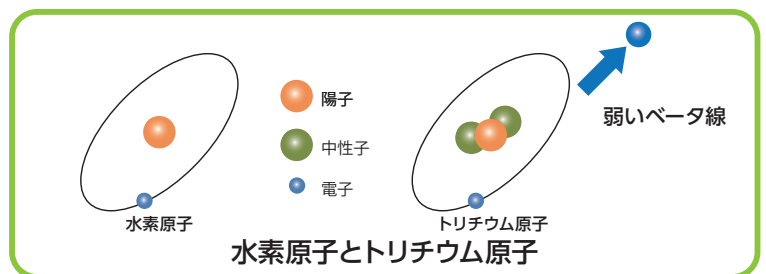
主 催： 公益財団法人 環境科学技術研究所

トリチウムの生体影響について 調べています

再処理工場からは、通常の運転時でも水素の放射性同位体であるトリチウムが空気中や海に排出されます。

排出されるトリチウムによる人体への放射線被ばく量は自然放射線より少ないとされていますが、より詳しく評価するため、環境科学技術研究所（六ヶ所村）では、新たにトリチウム研究センターを立ち上げ、これまでの環境中でのトリチウムの動きに関する調査に加え、トリチウム水（HTO）、有機結合型トリチウム（OBT）といった化合物の違いと生体への影響との関係の解明に関する研究を行っています。

トリチウムは水素の仲間であり、そのほとんどがトリチウム水として存在しています。トリチウムから出る放射線は弱いベータ線のみですので、内部被ばくが考慮すべき課題になります。内部被ばく量は、トリチウムが水である場合と有機結合型である場合で違いが出るとされていますが、現在の基準は体内への滞在時間の推定に基づく代表値になっています。環境科学技術研究所では、化合物ごとの詳細な解析に取り組めます。



日本放射線影響学会「トリチウムによる健康影響」より

調査の詳細はホームページ（<https://www.aomori-hb.jp/>）をご覧ください。